

長谷宗悦

最も身近な他者

2025 年

最近、5歳になる息子が、自分にとって最も身近な他者であることに気づいた。

息子と遊ぶ時間も制作につながるのだと思えるようになってから、彼との生活を通して、自分自身をあらためて見つめ直すようになった。とはいえ、イラッとすることもあるのだけれど。

歳を重ねるにつれ、多様性を「理解する」ことはできても、それを「認める」ことの難しさに、しばしば直面する。

信条や富の格差が対立を生む時代にあって、権力を持つ者たちは、自分に都合のよい「平和」を押し付け、自分に利のある者だけを認めがちである。彼らにとって、最初の身近な他者は誰だったのだろうか。その出会いのなかに、何か大切なものを見出すことはできなかったのだろうか。

他者とは、世界そのものだ。
この世界で感じ取った何かが、私を表現へと駆り立てる。
子どものころに想像していた平和な世界は、
今、私が生きているこの世界とは、どうやら同じではない。

人には、生まれながらにして選ぶことのできない背景がある。
それでもなお、他者を認め、共に歩むことの必要性を、

息子との時間が、そっと教えてくれている。